

# 鋼鉄の歯が奏でる夢仕掛けのアンティーク・オルゴール。その音色に魅せられて、とうとう博物館を開館



オルゴールの小さな博物館館長  
**名村義人さん**

音楽を好きな時に取り出して聴くことはできないかという人間の夢に挑戦し、小さな鋼鉄の歯をはじくことで音楽を再現することに成功したのがオルゴール（自動演奏装置）。そのオルゴールを夢仕掛けと名づけて世界から収集し、東京・文京区で博物館を開館した名村義人さんにオルゴールの魅力を語っていただきました。今回の取材はLSI事業部の牧野弘美さんです。

取材に行ってきた  
 専任・LSI事業部  
 インターワーキング事業推進部  
 牧野弘美さん

## スイス土産でもらった 見事なオルゴールに仰天

「名村さんがオルゴールに惹かれたきっかけは何ですか。」

名村「私がオルゴールを好きだということ、何だか女性っぽい趣味してるなと周りはいうんですよ。違うんだからといってもわかってくださらない。とても残念なんです。」

あれは四十代のはじめだったと思います。あるものを見てびっくりしたんです。私の母親がヨーロッパへ行った時、私の子どもへの土産にとくれたもの、それがスイス製の小さな円盤を使うオルゴールだったんです。しかも円盤を取り替えることによって十二曲ぐらいの曲が聞けるんです。それを見た時、私はもう、本当にびっくりしたんです。僕の頭の中でオルゴールといえは小さなオモチャのようなものしか考えられませんでしたから、なんなんだ、これは、と思ったんです。それがオルゴールにのめり込むきっかけでしたね。

で、僕は好奇心を刺激されて、オルゴールの本を外国から何十冊と取り寄せて読んでいたら、「このオルゴールを聞く」と心が洗われる」とか、「天使があなたに話しかけてくるよ」とか、そういう表現があるんですよ。そういわれたらどんな音なんだろうって聴きたくなるじゃありませんか。そんなことから入って集めはじめると、世界各国にオルゴール仲間ができて、珍品が出ると知らせてくれる

それを手に入れて、こうして集まったのがこの博物館のものなんです。今二百八十点ぐらいあります。

この博物館では、オルゴールの二百年ほどの歴史を説明しています。オルゴールの歴史が全部通して見られるというところが前提になっていますので、おそらく世界中のオルゴールの歴史的發展においてここにはないものはないだろうと自負しています。アンティーク・オルゴールの初期から滅びるまでが全部そろっているはずですよ。

これは自慢話になってしまふんですが、オランダでは国家的事業でオルゴールを集めているんですけど、そのオランダ国立博物館の館長さんがここへ見えた時、おまえはいい眼をしてるって褒めてくれたんですよ。嬉しかったですねえ。それから外国のオルゴール好きな友達などが来て、なんだ日本にもすごいのがあるじゃないかといって驚く、こういう時が嬉しいですね。それと、アンティーク・オルゴールの珍しいものは誰々のところにあるってわかっている、そういう世界のようなですね。」

## オルゴールの澄んだ音色は鉄そのものの音

「名村さんがオルゴールの音に惹かれた理由は何か。」



名村「オルゴールの音って澄んでてきれいでしょ。レコードやCDもいいですけど、オルゴールって生演奏なんでしょうよ。箱の中に楽士さんが住んでるようなものなんです。それで、今日は俺ちよつと疲れたから君たち、演奏を聴かせてくれないうつてネジを巻くと、ちゃんと演奏してくれるんですよ。上手な楽士や下手な楽士がいっぱい住んでるんですよ、この箱の中に」

演奏に上手下手があるんですか。

名村「ええ、それは曲のアレンジが大きいものをいいますね。それから歯輪にいい鉄を使っているか悪いのを使ったかで違ってきます。鉄そのものなのですから、あのきれいな音は。楽器の弦と同じです。オルゴールの一番の命は鉄でできています。歯輪の形をしていいますから、それをわれわれは「歯」といっています。

オルゴールというのは音楽入り時計から発達したものでしょう。一七七六年には歯輪を使った音楽入り時計が製作されています。初めはシリンドラー・オルゴール



ルから発達しました。金属の円筒に植えこんだピンで鋼鉄製の歯輪の歯をはじくことにより音を出すのです。でもシリンドラーにピンを一本一本植えこんでいく作業は大変で大量生産が出来ないため、やがて円盤を回転させて演奏するディスク・タイプが登場します。それが一八六六年のことです。その後、オルゴールはどんどん大型化されて、カフェなどでコインを入れると演奏するものまで出てきました。そうしたところへエジソンの蓄音機発明、そしてレコードの登場でオルゴールの需要は衰え、一九二〇年にラジオ放送が始まると完全にその生命を終えるんです。一九二一年には最大手のレジナ社が社業を閉じています。

このようにオルゴールは時計技術から発展してきていますから、メカニズムの点からいってスイスで生まれました。一方、大きな歯輪を鋳造して、焼きを入れて、寸分の狂いもない完全な歯を作るといふ点では、ドイツが優れていました。ですからいいアンティーク・オルゴールはスイスとドイツに限定されています。

歯輪の歯の数は、初期のものは二〇とか三〇と少なかったのですが、後期になると複雑な演奏を要求され、歯の数も二〇〇を越えるものも出てきました。鋼鉄を歯の歯のように研磨し、その先端をピンではじけるほどの細いものに磨き上げるわけですが、この鉄の焼入れ技術や研磨技術は現代ではとても再現出来ない複雑で緻密な技術だそうで、かつてのド

## 長く生き延びてもらうための維持保存技術の確立

「これだけ精密な古いオルゴールを所蔵していると、手入れが大変でしょう。」

名村「ええ、相当昔の鉄ですからどんどん錆びていきます。コーティングしてあるわけではありませんしね。音楽を奏するという意味ではどんどん死んでいきま



います。一番困るのはゼンマイですね。ゼンマイが切れると日本では修理できないんです。日本でも大型のオルゴールは作られています。今はみんな電動になつているのでオルゴールに合ったゼンマイがないのです。現代のオルゴールも音はきれいですけど、ゼンマイの持つゆらぎのようなものは失われています。

だから私はこれらを直す技術者を育てるのが夢なんです。出来るだけ寿命を延ばしてやりたいんです。物は死んでいくものだから、生きてる間にどれだけ多くの人に楽しんでもらえるか、それが生命なんだと思うんです。これからはと皆さんに古い音を聞いていただくために、維持保存していく技術者を育てていきたいですね。少しでも長く生きて大勢の人に楽しんでもらえれば、作った人も満足だろうと思うんです。それが私の夢であり、責任だと思っています」

オルゴールの小さな博物館に関するお問い合わせは ☎〇三―三九四―〇〇八まで



牧野弘美さん

アンティーク・オルゴールを自にしたときは音が鳴る程度かかと思っていたのですが、実際に聞いてみるとちよつとしたクワイエストラからの立派な音楽なので驚きました。オルゴールの中の小さな鉄がこんな重要な役割を果たしていることを知って、誇らしいような嬉しいような気がしました。

振興・LSI事業部 インターワーキング事業推進部